

学校名：^{やまぐちしりつりょうじょうしょうがっこう}山口市立良城小学校
 校長名：山本 晃久
 所在地：山口市吉敷佐畑三丁目3番3号
 電話番号：083-922-0003

○ 体育授業のつながりから、他の学校行事への自主的な参加へとかかわりが広がっていくことになった。

I 実践校の概要

1 学校・地域の特色及び実態

本校のある吉敷地区は、吉敷毛利の藩校「憲章館」の遺風を継承する文教尊重の気風の高い落ち着いた地域であり、地域住民の学校教育に対する関心も高く、協力的である。児童は、素直で明るく、何事にも熱心に取り組む。近年、NHK全国音楽コンクール全国大会で銀賞、昨年度タグラグビー選手権全国大会に2年連続で準優勝するなど、文武両道で日頃の成果を発揮している。学校経営の具体目標として、3本の柱（確かな学力・豊かな心・たくましい体）を掲げ取り組んでいる。特に体育に関係するところの「たくましい体」では、「健康で明るく、たくましい子ども」を子ども像として、体育指導の充実、外遊びの奨励、食育の推進、健康・安全教育の充実に努めている。

2 学校の概要（平成22年5月1日現在）

学年等	1年	2年	3年	4年	5年	6年	特支	計	
学級数	5	5	4	5	5	4	4	32	
児童数	男	90	91	67	81	86	81	12	508
	女	75	66	69	84	71	65	8	438
	計	165	157	136	165	157	146	20	946

II 活用事例及び今後の展望等

【本事業の成果の要点】

- 難易度が高くなるにつれて難しくなる技の模範を子どもの前で示すことができ、子どもの意欲付けにつながることができた。
- 教員と複数の学生が指導することで、目が行き届き、指導の充実と安全の確保を図ることができた。

1 研究テーマ等

(1) 研究テーマ

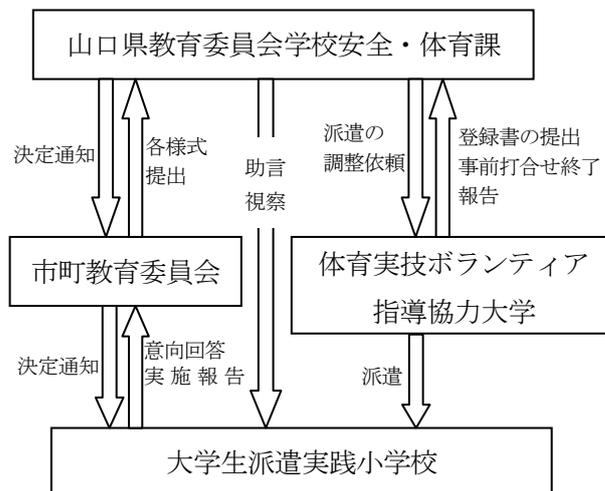
教員を目指す大学生とつくる小学校体育授業の在り方

(2) 研究テーマ設定のねらい

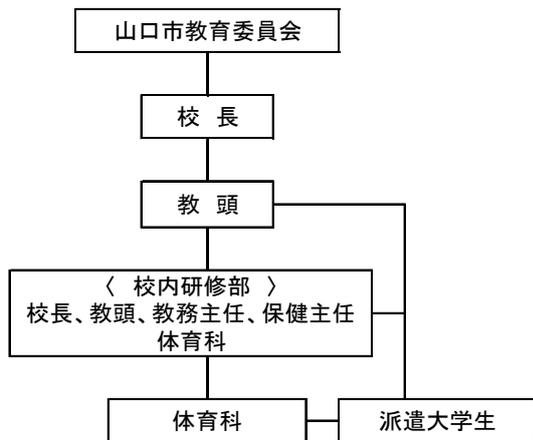
子どもたちに体育は人気のある教科ではあるが、器械運動に関しては、「できる・できない」がはっきりしており、苦手意識を持っている子どもが多い。また、教員も高学年になるにつれて、技の難易度が上がるため、師範したり助言、補助したりすることが難しいという声を耳にする。

そこで地域スポーツ人材を活用して、ボランティアの師範実技により、技のイメージを視覚的に掴ませると共に、技のポイントや注意事項などを具体的に学ぶことができることをねらいとして、本研究テーマを設定した。

(3) 取組体制



取組体制（校内）



(4) 本事業における主な取組

- 5月：県教委と大学との打合せ
- 6月：市町教委が小学校へ意向調査実施
- 7月：県教委による大学生への説明会
：ボランティア登録依頼
- 8月：市町教委が派遣小学校の調整
- 9月：県教委が派遣校決定を市教委に通知
県教委と大学担当で派遣学生の調整
県教委，派遣決定学生対象の事前指導
- 10月：派遣開始
：大学生と派遣小学校体育担当者との
事前打合せ
：授業実施
：事後アンケート実施
- 2月：派遣終了

2 活動及び活用事例



○大学生による試技の補助（台上前転）

< 器械運動（跳び箱運動） >

①目的

今回、器械運動を実施するにあたり、高学年の指導課題として上がっている技の師範と補助を外部指導者として地域指導員の学生を活用する。そこで、子どもの意欲・向上につなげる。

②具体的な指導方法

跳び箱の準備を行い、準備のできたグループから、主運動に繋がる準備運動を行った。（かえるの足打ち、かえるとび、かえるの逆立ち、手押し車、跳び箱にのりジャンプして降りる）全てのグループが終わった頃、児童全員が集まり、今日のねらいと課題について共通理解を行った。

活動1として「いろいろな技ができるようになろう」として、自分にあつためあてで跳び箱運動に取り組んだ。はじめに学生に技の師範をしてもらい、技のポイントや注意事項を話すことで、どの部位に着目して練習すればよいかを明確にした。

一人一人めあてが違うため、自分にあつた場を選び活動を行った。副読本を参考に友達と場を工夫してついたり、アドバイスし合ったりして活動に取り組んだ。その際、事前に打ち合わせをしていた場に学生が補助としてつき、技のポイントやどんな練習を行えばよいかなどを個別に助言したり、賞賛したりした。

③成果・課題

今回6年生で授業を行ったが、高学年になると技の難易度もあがり、担任が師範できない技も増えてくる。そういう時に言葉やイラストだけで説明するのではなく、今回のように子ども達の目の前で師範してもらうことで、技のイメージを視覚的に掴ませることができた。さらに技を見ながら、教師の方で技のポイントや注意事項などを具体的に示すことができ、子ども達は分かりやすかったようで、副読本を見ながら、「さっきのは、ここのことだね。」と、友達と助言し合う姿もあった。

また、児童の実態に応じて多様な場を設定し

たが、それぞれの場では個に応じた練習方法や課題があるので、その場に補助につくことで、個に応じた指導（補助、助言）と安全管理ができた。担任一人で行うよりも、より細やかな助言と安全面で大変効果が高かった。子どもたちの感想の中にも「ほめてもらえて嬉しかった。」

「いろいろなところに先生（学生）がいたので安心して活動できた。」「先生（学生）に教えてもらって上手になった。」という感想を残した児童が多く見られた。



○ステージの段差を利用して頭跳ね跳びの練習

意欲面でも効果があり、跳び箱運動に対して苦手意識を持っていた児童も、多様な場それぞれに先生（学生）が補助と指導することにより、順番を待たずに活動でき、自分の上達に、自信をもつ姿を見取ることができた。

「体育は跳び箱運動をするよ。」と言うと、「やったー。」という声が返ってきた。嬉しい限りである。

以上のことから、教員を目指す大学生を活用することは、次のような成果が表れたと思われる。

- 難易度が高くなるにつれて難しくなる技の模範を子ども前で示すことができ、子どもの意欲づけにつながる。
- 教員と複数の学生が指導することで、目が行き届き、指導の充実と安全の確保を図ることができる。
- 体育授業のつながりから、他の学校行事への自主的な参加へとかわりが広がっていく。



○大学生によるかかえ込み跳びの模範演技

課題としては、今回4クラスが1時間ごと活動したが、学生ボランティアも1時間目より4時間目になる方が、助言の内容や補助の仕方の上達し、自信をもって活動していた。本校のような大規模校では、そのようなことも可能だが、1時間ごとに学年が変わる場合、対応が難しく慣れてきた頃に終わってしまうことも考えられる。

また、事前の話し合いを密にしておかないと、活動に無駄が生じたり学生の役割が曖昧になってしまったりすることが予想される。学生が授業で行う運動を専門にしている場合とそうでない場合によっても役割等は変わってくるので、可能な限り早めに学生が専門にしている運動がわかると、学校側としても計画が立てやすい。学生と児童との関わりだけでなく、学生と教員との関わりが今後の課題として考えられる。

3 今後の展望

本事業による派遣は、大学生4人が6年生の各クラスに同じ単元である「跳び箱」の授業を1時間目から4時間目まで連続で実施した。

大学生に限らず、一般の地域スポーツ人材を有効に活用するためには、

- 年間を通して継続した活用の重要性
- 多様な運動種目に対応できるように複数の人材の必要性
- 傷害等に対する危機管理の必要性

○旅費、褒賞費等金銭面に関する考え方 等の課題を解決していくことで、体育授業の一層の充実が図られ、子どもは各運動種目の楽しさを味わうことができ、担当の教員は地域のスポーツ人材から専門の指導方法を学び、指導力向上に役立てることができる。

この循環が定着することで、子どもの運動に親しむ習慣を育成し、体力の向上にもつながっていくと思われる。



○大学生による試技の補助（台上前転）



○ステージの段差を利用して頭跳ね跳びの練習



○大学生による台上前転の模範演技